

城下を通る西国街道

姫路城下の西国街道は、外京口門から入り、現在商店街となっている二階町、西二階町などを通り抜け、備前門から城下町の外へ至りました。歴史ある神社を訪ねたり、お買い物を楽しみながら、のんびり歩いてみませんか。



旅人④ シーボルト
(1796～1866)
ドイツの医学者・博物学者
文政6年(1823)、長崎出島のオランダ商館付の医師として来日したシーボルト。オランダ商館長の江戸参府の際、生津から陸路をとり、姫路や高砂に立ち寄りながら大阪へ向かいました。その際の詳細な記録は「一八二六年の江戸参府記」に記されています。

備前門橋
平成26年(2014)に、備前門橋の礎石と橋台の一部が見つかりました。参勤交代にも使われた立派な木製の橋だと考えられています。

江戸時代、人相書きなどの触書に記した高札場がありました。城下町で最も多くの人々が往来する十字路口に建てられました。

家老河合才翁が財政改革のため設けた切手会所。木綿会所跡。

参勤交代の途中で「姫路城下を訪れた大名は国府寺家(本町) 椀箱家(堅町) 那波屋(西二階町)が中心となって務めた本陣(身分の高い旅行者のための宿泊施設)に宿泊しました。

長壁神社
江戸吉原の高尾太夫を落籍した神原政岑が始めたといわれるゆかたまつりは、ここ、長壁神社の夏祭りです。

当時としては珍しい二階建ての商家が建ち並んでいたことからその名で呼ばれたと伝えられます。

これ(市川)よりたゞちに望めば、姫路の城の天守高くみわたされて、風景いはんかたなし。

旅人③ 大田南畝
(1749～1823)
狂歌師・戯作者・幕臣
文化元年(1804)、長崎奉行所へ向かった南畝は、旅中にも詳細な記録をとり、行きには「革命紀行」、帰りは「小春紀行」と題する紀行を書き記しました。



▲山口県文書館 宝暦末期(1760頃)

街道絵図の傑作 『行程記』で見る姫路城下

宝暦末期(1760頃)、萩藩の絵図方役人である有馬喜惣太が描いた『行程記』。藩主の参勤交代の際に各地の様子を知ってもらい、旅を楽しませるために作成されたもので、巻首から見ると江戸へ向かう「登」に、巻末から見ると萩へ向かう「下り」になる趣向が凝らされています。



十返舎一九の『播州膝栗毛』

享和2年(1802)、戯作者・十返舎一九(1765-1831)が弥次・喜多を主人公に書き始めた「東海道中膝栗毛」は、大人気となり約20年間書き継がれました。「播州膝栗毛」でも姫路、御着、石の宝殿、曾根天満宮と播磨の名所を舞台に滑稽な物語がつづられています。弥次郎兵衛が姫路城下の宿で旅の娘に夜這いをかけようとしたところ、狸に化かされて大騒ぎに…。



お夏清十郎(「好色五人女」より)

17世紀の半ば、姫路城下で実際に起きたといわれる事件をもとに、井原西鶴が「好色五人女」に描いた「お夏清十郎」。姫路城下の本店・但馬屋の娘、お夏は室津の作り酒屋の息子でありながら、故あって但馬屋の手代として奉公していた清十郎と、禁断の恋に落ちます。二人は駆け落ちしますが、連れ戻され、清十郎は盗みの濡れ衣を着せられて処刑されます。お夏は悲しみのあまり気がふれてしまいました。